

「オンジエ通りの怪」

松岡光治訳

ほとくの話は人に語って聞かせるような価値など——少なくとも紙に書いて読んでもらう価値などありません。これまでも話をしてくれるように頼まれたことは何度かあります。実際に今回も、家の外では冷たい風が悲しげな音を立てて吹き、家の中ではすべてが快適で心地よい、そんな冬の晩に夕食を終えてから、申し分ない暖炉の火に照らされた聡明で熱心な皆さんの顔に囲まれ、こうやって語り始めてみると——自分で言うのもおこがましいのですが——滑り出しは上々だと言えます。とはいえ、皆さんの希望どおりにしようとするれば、それは勇気が必用となります。ペンとインクと紙は驚異的なことを伝えるには興ざましの道具ですし、「読み手」というのは明らかに「聞き手」よりも批判的な生き物なのです。しかし、日が暮れてから読むようにと、皆さんが友だちに勧めてくださるのであれば——ゾクゾクするよう

な得体の知れない恐怖の話が、しばし炉端の座談で問題になるようなことがあれば——それはまた話が別です。要するに、皆さんが語るべき好時期^(一)を確保してくださいのならば、ほくは自分の仕事に取りかかり、勇気を出して自分の語りたことを語るつもりです。では、そういった条件を前提とし、これ以上は無駄口をたたかず、怪事件の経緯をすべて簡潔に語ることにいたしました。う。

^(一) 従兄^{いとこ}のトム・ラドロウとほくは一緒に医学の勉強をしていました。^(二) 医者という職業に留まっていたならば、たぶん彼は成功していたでしょう。ですが、英国国教会^(三)の牧師の方に鞍替えしてしまい、その義務を立派に果たしている際にかかった伝染病の犠牲となって、残念なことに若死にしまったのです。さしあたり、彼の性格については、落ち着きがある一方で、ざっく

ばらんな明るい男だったと言えば、それだけで十分でしょう。とても厳格に真実を貫き、ぼくのような性格——興奮したり、神経質になったりする気質——はまったく持ち合わせていませんでした。

ぼくたちが大学の講義に出ていた頃だったでしょうか、ラドロウ伯父さんが——トムの父親ですが——オンジエ通り^(四)の古い屋敷を三、四軒ほど購入し、そのうちの一つが空き家になっていました。この伯父さんは田舎に住んでいたのです、その空き家に借り手がない間は、自分たちの住まいにしようじゃないかと、トムが言い出しました。そこに引越せば、講義のある教室だけでなく娯楽場の近くにも住めるようになるし、下宿の家賃を毎週払うことから解放されて、願ったり叶ったりじゃないかと言ったのです。

ぼくたちが持っていた家具は実に乏しく、身のまわりの品も質素で基本的なものばかりでした。要するに、ぼくたちの住まいの備えは、ほとんど野宿^{ビョク}同然に簡単なものだったのです。従って、ぼくたちは新しい計画を立てると、すぐ実行に移しました。表側の客間がぼくたちの共通の居間、その上の二階の部屋がぼくのもの、同じ二階の裏側の部屋がトムのものとなったわけです。ですが、どんなことがあっても、ぼくはその裏側の部屋を使用する気になれませんでした。

最初に言っておく必要がありますが、これは非常に古い屋敷でした。五十年ほど前に正面だけが新築された感じでしたが、この部分を除いて現代風に見える所は全然ありません。この屋敷を伯父さんのために買って権利書を調べてくれた代理人から聞いた話では、たぶん一七〇二年だったと思いますが、これは没収された他の多くの財産と一緒にチチェスター・ハウス^(五)で売却された家でした。もともとはジェイムズ二世^(六)時代のダブリン市長であったサー・トマス・ハケット^(七)が所有していたのだそうです。売却された当時、築何年になっていたかは分かりませんが、いずれにせよ長い年月の間いろいろと変化した結果、今では古い大邸宅によく見られるような、好奇心をそそると同時に気を滅入らせるような、謎めいていて悲しみに沈んだような、そんな雰囲気醸し出していました。

装飾の細かい部分を当世風にリフォームするようなことは、ほとんどなかったようです。その方がおそらくよかったです。というのは、まさに壁や天井、扉や窓の形、暖炉の前の風変わりな対角面、梁^{はり}や重厚な蛇腹^{じゅうぼく}には、何か過去と結びついた異様な感じがあったからです。言うまでもないことですが、階段の手すりから窓枠に至るまで、ごまかしを絶対に寄せつけず、現代の美装や上塗りをいかに多用してみても、その古さをハッキリと示してやまない、そうした非常に頑丈な木の工芸品についても、過

去と結びついた異様な雰囲気がありました。

実際には、客間に壁紙をはる程度の取り組みがなされていたのですが、その壁紙はどういうわけか寒々として場違いな感じがしたそうです。隣の横町で小さな泥饅頭どろまんじゅうのような店を営んでいる老婆が、その壁紙のことを憶えていました。ぼくたちが雇っていた女中は、この老婆の娘——とはいえ、五十二歳の老嬢——だけでしたが、彼女は夜明け時にやって来て大広間でティーの準備をすべて済ませると、すぐまた静かに退室して行きました。その彼女の母親から聞いた話では、当時ハロックスという（「首吊り判事」という評判が立っていて、検死陪審けんしはいしんの評決によれば、最後は自分自身が「一時的な狂気」に駆られ、子供の縄跳び用のロープを大きな古い階段の手すりにかけて、首吊り自殺をした）老判事がここに住んでいて、素晴らしい鹿肉と上等の古いポトワイン（十）で友たちをもてなしていたそうです。そんな黄金時代（十一）には、実際に広々とした客間の多くは、金箔をかぶせた牛革が壁にかけられて、さぞかし異彩を放っていたことでしょう。

寝室の壁はすべて板張りでした。表側の寝室は気持ちを暗くさせるような所がなく、居心地のよい佇まいたたずまいのせいでしようか、陰気なものを連想させることも全然ありません。しかしながら、裏側の寝室の方は違います。変な位置にあって人を憂鬱にするような、そんな二つの窓がベッドの足もとをぼんやりと見つめ、ダ

ブリンの古い屋敷によく見られる壁龕へきがん（十二）が、幽霊の出そうな大きな収納部屋——陰影相和あいわするという点で裏側の寝室と融合し、仕切りが溶けてなくなつたような収納部屋——ぼくたちの女中はよくた。夜中などは、この奥まった場所——ぼくたちの女中はよく引アルコッつ込みと呼んでいました——が、ぼくの目には何かいわくわくありげで、とても不気味な性質を帯びて見えたものです。このトムの寝室では、たつた一本しかない弱々しげな蠟燭が、その暗闇を照らそうと無駄な努力をしていました。そして、そこでは真つ暗な壁龕がいつも恐ろしい目でトムをにらんでいたのです——もつとも、そこは常に光線の通らない場所でしたが。とはいえ、このような印象は部屋の趣おもむきの一部にすぎません。どういわくわけか分かりませんが、ぼくはこの部屋全体に嫌悪感を覚えしました。その大きさや形状には、目に見えない不調和——何か不可解で筆舌に尽くしがたいもの——しっくりしていて安心できると密かに思えるような、そんな感覚とは何となく相容れない、どことなく疑心暗鬼を生じさせるような雰囲気があったからです。総合的に考えた結果、ぼくが最初に言いましたように、どんなことがあつても、こんな場所では一晩だつて一人で過すす気になれませんでした。

このように迷信に囚われる自分の弱みを哀あれなトムから隠そうなどという気もありませんでした。一方、トムはぼくの不安を心の底から馬鹿にして笑つていましたが、これから皆さんにお聞き

いただくように、この懐疑論者も自分の経験から教訓を得るよう
に運命づけられていたのです。

双方がそれぞれの寝室を占有するようになって間もなく、ぼく
は眠れぬ夜と安眠妨害について不平を漏らすようになりました。
元来ぼくは熟睡タイプで、悪夢にうなされるようなことは全然な
かったので、こうした不快なことに一層いらだっていました。し
かし、毎晩いつものような休息をとる代わりに、「しこたま恐怖
を味わう」^(十三)ことが、ぼくの運命となったのです。手始めに恐
ろしい不快な夢を連続して見たあと、ぼくを悩ませていたものが
ハッキリとした形をとるようになりました。細かい点ではどれも
大した違いがないような、そんな同じ幽霊の訪問を最初の週に少
なくとも(平均すると)二晩に一回、受けるようになったのです。
さて、この夢、悪夢、我慢ならない夢幻に——何と呼んでも結
構ですが——以下のように、ぼくはみじめにも翻弄されてしま
いました。

その時は真っ暗だったのですが、ぼくのいた部屋のすべての家
具と雑然とした配列が、この上なく忌まわしいことに、ハッキリ
と見えた——いや、見えたような気がしました。ご存知のように、
こんなことは普通の悪夢にありがちなことです。ところで、この
ように何でも見通すことができる状態というのは、さながらライ
トアップされた舞台の上で単調な恐怖の劇的場面^(十四)が披露され

るのを見るのに似ています。おかげで、幾晩かは耐えられない時
を過ごすはめになりました。そんな状態で、なぜか分かりません
が、ぼくの注意はベッドの足もとと向かい合った所にある窓にい
つも釘づけになったのです。そして、ぼくはいつも同じ影響を受
け、何か恐ろしい予感にじわじわと、しかし確実に囚われてしま
いました。

理由は判然としませんが、何か漠然とした恐ろしいことが、ど
こか見知らぬ場所、ある見知らぬ仲介者によって、ぼくを苦悩
させるために着々と準備されているような、そんな気がしていた
のです。すると、ある間隔をおいて——ぼくにはいつも同じ長さ
に思えたのですが——突然、一枚の絵が窓の所に飛んできて、ま
るで静電気を受けたように、そこにへばり付いてしまい、それか
らぼくにとつて恐怖の試練^{ディシプリン}が始まりました。たぶん数時間は続
いたはずですが。この窓ガラスに付着した不可解な絵は、絹でき
た深紅の花柄の部屋着をはおった老人の肖像画でした。ぼくはそ
の服の折り目を今でも詳しく説明することができます。老人の顔
つきは奇妙に混ざり合った知性と肉欲と権力を具現化していただ
けでなく、そこにはさらに邪悪で不吉な兆しもたくさん見て取る
ことができました。かぎ鼻はハゲワシの嘴^{くちばし}のようです。二つの
目は大きく、灰色で、飛び出していて、人間とは思えない残酷さ
と冷酷さで、ギラギラと輝いていました。こうした顔の上に深紅

のビロードの帽子が載っていて、その下からチラッと見える髪の毛は、老齢のために白くなっていました。眉毛の方は本来の黒さを留めていました。ぼくは石のように非情な顔の皺、色合い、陰りをどれもよく憶えています。それも無理はないのです！身の毛のよだつ顔にジッと凝視され、何時間にも思える苦悶を味わいながら、どういうわけか悪夢に魅せられたように、ぼくもまたジッと凝視していたからです。ですが、とうとう――

雄鶏おんけいが鳴いたので、消え去ってくれました――(十五)

夜の恐ろしい監視を通して、ぼくを金縛りにしていた、あの悪魔は。そうしてやつと、ぼくは苦しみもだえながらも、日々の務めがあったので起床したわけです。

この夜の苦悩の実態を親友のトムに詳しく説明するのは、いやでたまらないことでした。理由はハッキリと分かりませんが、悪夢の中で去来する不思議な幻影が、激しい苦悶や気味の悪い恐怖について受けた強烈な印象と結びついていたからかもしれません。しかし、忌まわしい夢に悩まされていることについて、ぼくは漠然とした形で彼に話してやりました。そして額を寄せ合って相談し、真偽が疑わしい医学的な唯物論(十六)に従い、呪術ではなく強壯剤を使うことで、恐怖を追い払うことにしたのです。

ぼくは素直に認めますが、この強壯剤は実に効験あらたかで、そのせいか忌々しい肖像画の出現が次第に途絶えるようになりました。これはどうしたことでしょうか？ 結局、この奇妙奇天烈な幽霊――恐ろしいだけでなく個性的でもある幽霊――は、ぼくの空想の産物だったのでしょうか？ それとも、胃の調子が悪いせいで見たものでしょうか？ つまり、あれは（当時の専門用語を借りれば）主観的なものにすぎず、外部の第三者による明白な攻撃や侵入の結果ではなかったのでしょうか？ そういったことは、皆さん、ぼくたちが共にあとで認めることになるように、決して起こりはしなかったのです。あんな肖像画の形をとって、ぼくの五感を金縛りにした悪霊のやつは、同じように近くにおいて、精神的に活動し、こちらに悪意を抱いていたのかもしれない――もつとも、ぼくにはやつ姿が見えなかったのですが。自分の体調をちゃんと維持し、酒を飲まずに節制しておれば、啓示宗教(十七)の道徳律など問題になることはないでしょう。物質界と霊界との関係は瞭然として明らかなのです。すなわち、身体組織が健全な状態で、そのエネルギーが損なわれていなければ、ぼくたちは様々な悪影響に対して自己防衛できるかもしれません。そうでない場合は生活自体が恐ろしいものになってしまうのです。催眠術師(十八)や電気生物学者(十九)も、平均すれば十人の患者のうち九人に対しては失敗するのです。だから、悪霊だって同

じかもしれません。ある種の靈的な現象が生じるには、身体組織が特別な状態にあることが絶対必要なのです。そういった活動は時には成功し——時には失敗する——それだけのことです。

これはあとから知ったことですが、懷疑論者を自認していた親友もまた、どうやら悩みを抱えていたようです。とはいえ、その頃のぼくはまだ何も知りませんでした。ある晩のこと、ぼくは珍しく熟睡していましたが、突如として寝室の入り口の部屋で足音がしたので、目を覚ましてしまいました。そして、その足音にすぐ続いて、大きなガランガランという音が聞こえたのです。あとになってから、その音は大きな真鍮製の燭台が原因だったと分かりました。哀れなトム・ラドロウが力を込めて階段の手すり越しに投げた燭台が、もう一つ別の階段をはね返りながら転がり落ちて行く音だったのです。これとほとんど同時に、トムがいきなり扉を開けて、多くの部屋へ後退りして飛び込んできました。彼の興奮たるや尋常ならざるものでした。

ぼくはベッドから飛び出て、自分がどこにいるかもハッキリと分からないまま、彼の腕をつかんでいました。そこで、ぼくたちは——シャツ姿のまま——開いた扉の前に立ち、向かい側の大きな古い階段の欄干を通して、雲のかかった月の青白い光がすかに射し込んでいた入り口の部屋の窓を見つめていました。

「どうしたんだ、トム？ どうかしたのか？ いったい全体どうし

たんだね、トム？」不安でいらいらしていたぼくは、彼をゆさぶりながら問い正しました。

彼は深呼吸してから返事をしましたが、あまり筋の通った返事ではありませんでした。

「何でもない、まったく何でもない——ぼくは何か——何か言ったかい？——リチャード、蠟燭はどこだ？ 真っ暗じゃないか。ぼくは——ぼくは蠟燭を持っていたんだぞ！」

「ああ、真っ暗だよ。でも、どうしたんだ？——ホントに何事だね？——話してくれ、トム——正気でも失ったのか？——何事かね？」

「何事かねだって？——ああ、すべて終わった。あれは夢だったに違いない——夢以外であるはずがない——そう思わんかね？ 夢じゃないなんてことはありえんよ」

「もちろん」と、ぼくは途徹もなく不安になりながら言いました。「実際に夢だったのさ」

「多くの部屋に誰か男がいると思ったんだ。で——それで、ベッドから飛び出たのさ。で——それで、蠟燭はどこ？」

「君の部屋だよ、たぶん。行って取ってこようか？」

「いや、ここにいてくれ——行かないでくれ。何でもないんだ。行かないで、お願いだ。すべて夢だったんだ。扉に錠を下ろしてくれ、ディック。君と一緒にここにいるからさ——不安なんだ。

だから、ディック、後生だから、君の蠟燭に火をつけて窓を開けてくれ——お話にならない状態なんだ、ぼくは」

頼まれた通りになると、彼は女海賊グラニユエイル^{三〇}のように毛布を一枚まとって、ぼくのベッドのすぐそばに腰を下ろしました。

誰でも知っていることですが、どんな種類であれ、恐怖というものは伝染しやすいものです。トムが苦しんでいた特別な種類の恐怖はとりわけそうでした。このように彼をふがいない男にしました、見るも恐ろしい幻影の詳細については、世界を半分やると言われても、その時だけは聞く気になれませんでした。彼もまた繰り返し話したくはなかったことでしょう。

「君の馬鹿げた夢のことなんか、話してくれなくなつて構わんよ、トム」と、ぼくは軽蔑を装いながら言いましたが、内心は恐怖におびえていました。「別のことを話そうじゃないか。でも、この汚い古屋敷がぼくたちの体質に合わないのは確かだ。消化不良とか——えーっと——寝苦しい夜とかに悩まされてまで、誰がこんな所に長居なんかするもんか。だから、ぼくたちは新たに下宿を探した方がいい——そう思わんかね？——すぐにも」

トムは同意してくれ、しばらくして言いました——
「リチャード、ぼくは考えていたんだけど、親父と最後に会つてからずいぶん時が経つから、明日ちよつと田舎へ会いに行つ

て、一日か二日で戻ってくることにするよ。だから、その間に君が新しい部屋を借りておいてくれよ」

こうした決心が幻影にひどくおびえた結果であることは明らかでしたが、その決心もたぶん翌朝になれば夜の闇や露と一緒に消えるだろうと思いました。ところが、それはぼくの勘違いでした。ぼくが適当な下宿を見つけたら、トムの訪問先であるラドロウ伯父さんの所にすぐ手紙を出して呼び戻すという合意のもと、彼は薄明に起きて田舎に向かって出発したのです。

さて、ぼくも住まいを変えたいのは山々だったのですが、偶然ちよつとした遅れや思いがけないことが連続して起こったので、賃貸契約が済んでトムを呼び戻すための手紙を出すまでに、一週間が経過してしまいました。その間にささいな事件が幾つか語り手であるぼくの身に起こったのです。今となつては遠い昔のことなので馬鹿らしいことに思えますが、そういう事件のせいで、当時は本当に早く引越したいという気持ちに駆り立てられていました。

竹馬の友が出立して一日か二日した晩のこと、ぼくは部屋の扉に錠を下ろして、暖炉のそばに座っていました。ガタガタする三脚台の上には、大きなガラス容器で温かいウイスキー・パンチ^{三二}を作るための材料が置いてありました。それは、ぼくを取り囲んでいた——

黒、白、青、ネズミ色の幽霊たち^(二二)

を遠ざけるのに最善の方法、つまり偉い先祖たちが推薦してきた方法を採用し、「体にお酒を入れて体から元氣を出す」^(二三)ためのものでした。ぼくは解剖学の本を脇に投げてしまったあと、パンチを飲んで寝るのに先立って例の強壯剤を飲みながら、『スペクター』誌^(二四)を五、六ページほど読んでいました。ちょうどその時のことです。屋根裏部屋から降りる階段のあたりで足音が聞こえました。それは夜中の二時のことで、外の街路は教会墓地のように静まり返っていました。ですから、その足音はハッキリと聞き取れました。狭い階段を上から降りてくる、そのゆつたりした重い足音には、老齢のせいも緩慢な動きで大きな音を出してしまうような特徴がありました。この足音のさらに奇妙な点は、ドシンという音とパタツという音の中間のような——耳にするだけでも恐ろしい——音から推測するかぎり、音源の足が間違はなく裸足^(二五)であったということです。

女中は何時間も前に帰ってしまい、この屋敷に用があったのは自分だけです。そのことはよく分かっていました。階段を降りてくる男に、足音を隠すつもりが全然ないこともまた明らかでした。それどころか、まったく不必要なほど大きな音を立て、わざと慎重に歩を進めたがっていたようです。ぼくの部屋を出たあた

りまで、つまり階段の一番下まで到達すると、その足音は急にピタツとやみました。ぼくは今か今かと待ち受けていました——部屋の扉が自動的に開き、あの忌々しい肖像画のモデルが入ってくるのを。しかし、数秒後に足音がまた聞こえ始めたので、ぼくはホッと胸をなでおろしました。それは前と同じような動きです。奥の客間の方につながっている階段の部屋を通り、そこでまたしばらくストップしてから、もう一つの階段を降りて玄関の広間の方へ行き、そこからは何も聞こえなくなりました。

さて、足音が聞こえなくなるまでの緊張状態の中で、実に不快なこと、ぼくの心の動揺は言うなれば頂点に達していました。耳を澄ましても風がそよぐ音さえしませんが、ぼくは勇気を出して、ある実験をすることにしました。扉を開け、ステントール^(二五)のような大声で階段の手すり越しに、「そこにいるのは誰だ？」と怒鳴ったのです。応答なし。人の気配がない古い屋敷の中で、ぼくの声が響き渡っただけです。例の動きが再開されることもありません。要するに、ぼくの不快感にハッキリとした方向づけをするような、そんなことは何も起こらなかったのです。こうした状況下では、一人で声を力一杯あげても無駄なことですが、実に不快にも、その声の響きには人を失望させるようなところがありました。そのせいでしょうか、ぼくの孤立感次第に高まり、開けたままにしておいたはずの背後の扉が閉まっているのに気づく

と、急に不安が募ってきました。それは退路を断たれるかもしれないという漠然とした不安です。できるだけ急いで自分の部屋に戻り、そこに朝方までジツとしていましたが、自分が監禁状態に陥ってしまったと思うと、本当に不愉快な気持ちになりました。

翌日の夜、あの裸足の年老いた同居人は戻ってきました。た。とはいえ、その次の日の夜は、ぼくが床に就いて暗闇の中にいると——大体この前と同じ時刻だったと思いますが——またしても例の老人が屋根裏部屋から降りてくる足音をハッキリと聞くことになったのです。

今回はパンチを飲んでいただけのもあって、敵を迎撃するための志気は、いやが上にも高まっていました。ぼくはベッドから飛び出して、火が消えそうな暖炉の前を通る時に火かき棒をつかみ、アツと言う間に玄関の広間に来ました。この時には足音もすでに聞こえなくなっていたので、暗闇と寒さに志気をくじかれてしまいました。人間の姿をしていたのか、クマの姿をしていたのか、どちらか分かりませんが、黒い怪物の姿が見えた、あるいは見えたような気がしたのは、その時でした。その時の恐怖がどんなものだったか考えてもみてください。怪物は背中を壁に向け、玄関の広間に立ち、大きな緑がかかった二つの目をぼんやりと光らせながら、ぼくと向かい合っていました。ところで、ぼくは包み隠さずに告白しなければなりません、実はそこに皿や茶碗を陳

列した食器棚があったのです——もともと、その時は気がつきませんでした。同時に、次のことも正直に言っておく必要があります。想像力をかき立てられていた点を考慮したとしても、このことに関して、ぼくが自分の空想の餌食^{えじき}になっていたとは、どうしても思えません。というのも、まるで変身の始まりであるかのように、この亡霊は何度か姿を変えたあと、(ぼくには考え直したかのように見えたのですが)再び最初の姿に戻り、ぼくの方に向かって進み始めたからです。勇氣というよりはむしろ恐怖から本能的に、ぼくは手に持っていた火かき棒を亡霊の頭めがけて力まかせに投げつけました。そして、ガシャーンという物凄い音を聞きながら、自分の部屋に逃げ帰り、扉に二重に錠を下ろしました。それから一分ほどすると、あの恐ろしい裸足の男の階段を降りてくる音が再び聞こえ、その音は前回同様に玄関の広間で消えてしまったのです。

前の晩の亡霊はぼくの空想^{ファンタジー}による視覚上の幻で、単に食器棚の薄黒い輪郭と戯^{たむ}れていただけかもしれません。また、あの恐ろしいげな二つの目玉は逆さに置かれた茶碗にすぎなかったのかもしれない。しかし、いずれにせよ、ぼくは火かき棒を思いっきり投げつけ、本当に奇抜^{フツブツ}な言葉を使えば、「二つの目玉をぶんどって一つ目小僧にしてやった」^{二つ目}のです。そのことは壊れて粉々になった茶道具一式が証明してくれます。これらの証拠に

よって、勇気と元気を出そうと努めたのですが、どうしても駄目でした。こんなことでは、あの恐ろしい裸足の足音——階段の上から下までずつと降りながら、ひっそりした幽霊屋敷の隅々まで、しかも草木も眠る丑三つ時に、時を定めて聞こえたドシン、ドシン、ドシンという足音——について、何かが分かったなどとはとても言えません。畜生め！何もかも腹立たしい。ぼくは意気消沈してしまい、夜になるのが怖くなりました。

夜の到来を不気味に告げるかのような雷鳴が聞こえ、気が滅入るような鬱陶しい土砂降りの雨となりました。街路はいつもより早く静かになり、十二時になる頃にはバラバラと侘びしく降る雨の音しか聞こえなくなりました。

ぼくはできるだけ居心地よくしていました。蝋燭も一本ではなく二本に火をつけ、絶対に床には就くまいと思ひ、蝋燭を手にとって今か今かと突撃に備えていました。というのは、もし屋敷の夜の無言を乱したものが肉眼で見ることのできるものであれば、是が非でも、この目で見てやろうと決めていたからです。ぼくはそわそわして神経質になったので、書物に関心を移そうとしましたが、やっぱり駄目でした。部屋の中を行ったり来たりし、軍楽や楽しい曲を口笛で順繰りに吹きながら、あの恐ろしい足音が聞こえはしまいかと、時おり耳を澄ませてみました。しばらくして腰を下ろし、もったいぶって打ち解けなさそうな顔をし

たウイスキー・ボトルの四角いラベルを見つめると、「フナガン社の極上モルト・ウイスキー」という文字が、異様で恐ろしい想念——ぼくの頭の中で互いに追いかけてっことをしていた想念——の静かな伴走者のように見えてきました。

その間に周囲はさらに静かになり、さらに暗くなっていました。馬車のガタゴトいう音とか遠くの方で喧嘩でもして騒いでいるような鈍い音とかが、聞こえるのではないかと耳を澄ませてみました。聞こえるのはただ、ダブリンの山々を越えて聞こえなくなった雷鳴に代わって、風が出てきた音だけでした。この大都市の真ん中で、ぼくと一緒にいるのは自然の女神だけ、そして神のみぞ知るあるもの、ただだと次第に思うようになりました。ぼくの勇気は潮が引くように消えかかっていました。だが、今回は多くの人間に威勢をつけてくれるパンチ酒のおかげで、ずんぐりして肉がたるんだような裸足で、再び階段をゆつくりと降りてくる例の足音に対して、なんとか図太い神経と固い決意とで対処できそうな気がしました。

ぼくは蝋燭を手に取りましたが、震えていなかったと言うと嘘になります。部屋の床を横切るとき、その場しのぎに祈りの言葉を神様に発しようとしたが、聞き耳を立てるために急に立ち止まり、その言葉を途中でやめました。足音は相変わらず聞こえています。正直に言うと、勇気を奮い起こして扉を開くまで、そ

の前で数秒ためらっていたのです。ですが、あのいまいま忌々しい音がやんだので、安心して階段の手すりの近くまで思い切って進み出しました。すると、ぼくが立っていた階段の一、二段下のあたりで、この世のものと思えない物体によって、床がドシンと強打されました。うわあ！ぼくの視線が捕らえたものは、動いていてではないですか！その大きさはゴリアテ(二七)の足ほどもあります。灰色つぼくて重量感があり、垂れ下がるような重い感じでズシンズシンと一段ずつ降りていました。ぼくが生きているのと同じくらい確かなことに、それは今まで見たことも想像したこともないほどの大きな灰色のネズミでした。

「口を開けているブタを見て胸がむかつく者もいれば、ネコを見ただけで気が狂う者もいる」(二八)——シエキスピアはそう言っています。このネズミを見たとき、ぼくは正気を失いそうになりました。というのは、笑われるかもしれませんが、この野郎は悪意に満ちた、まるで人間のような表情で、ぼくをジッと見ているぞと思ったからです。こいつがぎこちなく動きながら、ぼくの両足の間あたりから顔を上げたとき、例の肖像画に描かれていたあいつの悪魔のような目つきと忌々しい顔つきとが融合して、目の前のぶくぶく太ったネズミの顔になるのを見えました——間違いありません。あの時もそう感じましたし、今でもそれを憶えています。

ぼくは言葉では説明できないような嫌悪と恐怖を感じて、再び自分の部屋へ飛び込み、まるで向こう側にライオンでもいるかのように、かんぬきを扉にかけて錠を下ろしました。畜生め！肖像画も爺もくたばってしまえ！ぼくは心の中で、ネズミが——そうです、今しがた見た見たネズミめが、ネズミ野郎が——実は仮面をつけた悪魔で、何か夜の極悪非道な悪ぶざけのために屋敷中をぶらぶら歩いているのだと思いました。

翌朝、ぼくは早起きして泥道をてくてくと歩いていました。他の用事はさておいても、とにかく有無を言わずにトムを呼び戻したかったので、手紙を投函しに行つたのです。ですが、家に戻ってみると、この留守にしていた学友(二九)からの手紙が届いていて、そこには明日帰ってくる予定だと書いてありました。ぼくの喜びはいやが上にも増しました。なぜならば、うまい具合に新しい部屋がすでに見つかっていましたし、昨晚の半ば馬鹿げた、半ば恐ろしい出来事を考えると、今回の転居と親友の帰宅は特に嬉しいことに思えたからです。

その晩、ぼくはデージェス通り(三〇)に借りた新しい住居に何の準備もせずに泊まって、翌朝は朝食のために幽霊屋敷に戻りました。トムは帰ってきたら即座に、この屋敷へやって来るに違いないと思つたのです。

ぼくの思つたとおり——彼はやって来ました。彼の最初の質問

は転居の主たる目的についてだったような気がします。

「ありがたい！」準備がすべて整ったと聞くや、彼は熱弁を振るうかのように言いました。「君のためにも嬉しいよ。ほくの方は、どんな考慮すべきことがあるかと、こんなひどい古屋敷では一晩だって過ごす気になれないよ」

「古屋敷なんて糞くらえだ！」ほくは恐怖と嫌悪が純粹に混ざったような声で叫びました。「ここに住むようになってからつても、ひと時だって楽しかったことはないじゃないか」と話を続けて、ついでに例のぶくぶく膨れたネズミの出来事を話してやりました。

「まあ、それだけのことなら」従兄いとこのトムは、このことを問題にしないで無視するふりをしながら、言いました。「あまり大しに気にならないな、ほくは」

「ああ、でも、あの目つき——あの顔つきはね、トム」ほくも負けずに言い返しました。「君だってあれを見ていたら、見かけとは違った何かがあるような、そんな気になっていたはずだぞ」

「そんな場合、一番いい悪魔払いきょうじんは強靱な猫を飼うことじゃないかって、いつもほくは思っているぜ」腹の立つような含み笑いを浮かべながら、彼はそう言いました。

「そんなことはいいから、君自身の体験を聞こうじゃないか」ほくも辛辣な言葉を返しました。

このように挑発されて、トムは不安げに周囲を見ましたが、それはほくが彼の非常に不快な記憶を呼び起こしたからに他なりません。

「じゃあ、聞いてもらおうか、ディック。ちゃんと話すからさ。畜生め！でも、こんな所で話していると、すごく気分が悪くなりそうだ。もつとも、ほくたちは頑丈な若者だし、今なら幽霊だって手出しなんかできないだろうがね」

彼は冗談のような言い方をしましたが、それは真剣に計画されたことだったと思います。その時ちょうどほくたちの女中へいが部屋（三）の片隅にいて、ひび模様の入ったデルフト焼きの茶器類やディナー用の食器類を籠に詰めていました。やがて彼女はその作業を中断し、口と目を大きく開いたまま、こちらの話に耳を熱心に傾けるようになりました。トムが体験したことは、およそ次のような言葉で語ることができます——

「三回も見たんぞ、ディック。確かに三回だった。あいつがほくに何かひどい危害を加えるつもりだったことは間違いない。実際、ほくは危なかつたんだ。途轍もなくね。だって、すぐさま逃げたからよかつたものの、たとえ他に何も起こらなかつたとしても、いざという時にきつと理性が働かなくなっていたらどうかね。なんとか逃げ出せたのはホントにありがたいことだった。

この忌まわしい騒動が始まった最初の夜、ほくは寝る準備をし

てから、あの場所をふさぐ古ベッドに横になっていたんだ。考えるのもいやだなあ。蠟燭の火を消して、寝てしまったように静かにしていたんだが、目はパッチリと覚めていた。でも、ちょっとしたことでも胸騒ぎがしたけど、思考経路は楽しく愉快なことに向いていたんだよ。

いずれにせよ、あそこで——寝室の向こう側にある、例の呪わしい、暗い壁龕で——怪しい物音が聞こえるぞと思っただのは、夜中の二時だったはずだ。まるで誰かがゆっくりと絞首索を床の上で引きずり、持ち上げて、ぐるぐると巻き、またゆっくりと床の上に落とすような、そんな音だった。一度か二度はくは起き上がったけど、何も見えなかったよ。それで、壁板の裏にいるネズミどもに違いないって思ったわけさ。好奇心はあつたけど、深刻な感じもしなかったの、数分後には監視するのをやめちまったよ。

妙な話だが、こんな状態で横になっていると、最初は超自然的なことなんかには気づきもしなかったけど、突然ある老人が——かなり恰幅かっかくがよくて、鹿毛色の化粧着のようなものをまとい、頭には黒い帽子ぼうしをかぶった、がっしりした老人が——ゆっくりとした堅苦しい動きで、寝室の向こう側にある壁龕から斜めの方向に姿を現わし、ぼくのベッドの足もとを横切って、左側の物置部屋に入るのが見えたんだ。あいつは脇の下に何か持っていて、頭

を片方に少し傾けていた。そして、その顔が見えたとき、うわあ！」

ここでトムはしばらく話をやめ、それからまた話を続けました——
「あの恐ろしい表情は死んでも忘れられんぞ。だけど、あれを見て老人の実態が明らかになったよ。あいつは右も左も向かず、ぼくのそばを真っ直ぐ横切って、そのままベッドの枕もとの近くにあつた物置部屋に入って行ったのさ。」

この何とも言えない、恐ろしい死と罪の化身が横切っている間、ぼくは自分が死体と化したみたいに、口も体も動かす力がなくなつたような気がしたよ。あいつが姿を消したあと何時間も、恐ろしさのあまり力が抜けてしまって、動けなくなつちまったのさ。翌朝、ぼくは明るくなるや、勇気を出して部屋を調べてみたよ。特に、恐ろしい侵入者が通つたように思える場所をね。でもね、誰かがそこを通つたことを示すような跡は全然なかった。物置部屋の床に散らばっていたガラクタ類を第三者が動かしたような、そんな痕跡は一つもなかったんだ。

それから、次第に少しずつ力を取り戻したんだけど、疲労困憊してしまい、とうとう熱っぽい睡魔に襲われちまった。それで、起きてくるのが遅くなつたんだ。君が例の肖像画について見た夢のことで意気消沈しているのに気づいたんで、今では確信してい

ることだけど、ぼくにも肖像画のモデルがハッキリと分かったから、自分が見た幻のことを君に話したくなかったのさ。実際、すべて幻覚だったんだと自分に言い聞かせようとしていたし、前の晩に頭に焼きつけられた忌まわしいイメージを、また強烈によみがえらせるのはいやだったんだ。つまり、自分が味わった苦しみを君に一つずつ詳しく述べることで、これまでずっと懷疑的だった自分の立場を危うくしたりしたくなかったんだよ。

次の夜、幽霊の出る自分の部屋に行つて、同じベッドで静かに休むのは、実のところ度胸が少し必要だったね——トムの話は続きました。「そうするのに少し体が震えちまったけど、別に恥ずかしいことじゃないさ。ほんのちよつとしたことでも、それが十分な刺激になつて、間違ひなくパニックに陥っていたはずだからね。でも、この夜は何事もなく、静かに過ぎ去つたよ。次の夜もまたそうだったし、さらに次の二晩か三晩も同じだった。次第に自信が出てきてね、ぼくは分光による幻覚^{三四}の理論の方を信じるぞつて、次第にそう思うようになったよ。もつとも、その理論によつて自分の確信に乗じ、すべて幻覚なんだと思おうとしても、最初のうちは失敗したけどね。

実際、この亡霊はどこから見ても変わり種だったよ。こつちの存在なんか気にも留めず、スーッと部屋を横切つて行つたんだからね。ぼくもあいつの邪魔をしなかったし、あいつもぼくには用

がなかったみたいだ。だったら、わざわざ目に見える姿で寝室を横切るようなことをして、いったい何になると言うんだ？ もちろん、人間の五感で識別できるような姿で寝室を通ることなく、あの壁龕^{へきだん}に入り込んだ時みたいに、今回もわざわざ寝室を通つて行かずに、たやすく物置部屋に入ることができたはずなんだよ。おまけに、いったい全体どうして、あいつの姿がぼくに見えたんだろうか？ 真つ暗な夜だったし、蠟燭も暖炉も火はついていなかったのに、ぼくには色合いも輪郭も人間の姿以上にハッキリと見えたんだぞ。強硬症患者^{三五}が見るような夢であれば、すべて説明がつくんだけどね。で、ぼくが出した結論は何かというと、あれはやはり夢だったということだ。

狂言癖に見られる最も顕著な現象の一つは、だます相手として是最も考えられない人間に対して、すなわち自分自身に対して、故意的に嘘をつく回数が非常に多いということだよ。このことで、君に言う必要もないけど、ディック、要するにぼくは自分に嘘をついていくせに、実に不快なペテン師である自分自身の言葉は、少しも信じていなかったんだ。だけど、ぼくは人間の習性として自分をだまし続けてしまった。単に同じことを繰り返すことで相手を疲れさせ、結局は信じさせてしまうような粘り強いホラ吹きやサギ師みたいなね。で、ぼくはうまく自分を言いくるめ、やっぱり幽霊については懷疑論者なんだと思つて、悦に入つてい

たつてわけさ。

あいつが再び現われることはなかったよ。それは確かに慰めになった。結局、あいつとあの奇妙な古着や異様な顔つきが、気になっていったんだろうか？ そんなことあるもんか！ あいつの姿を見ても平気だったし、いい話のネタを一つ儲けたわけだからな。というわけで、ぼくはベッドに転がり込んで蠟燭を消し、裏の路地で聞こえる酔っ払った夫婦の喧嘩に元気づけられて、ぐっすりと寝ちまったよ。

ところが、この深い眠りから、ハツとして目が覚めたんだ。恐ろしい夢を見たからなんだけど、どんな夢だったかは思い出せない。心臓が激しく鼓動し、ドギマギしちまって、熱っぽい感じになってね。ぼくはベッドで身を起こしたまま部屋を見渡したよ。カーテンのない窓を通して、月の光が洪水のように一杯あふれて射し込んでいたけど、何もかも前に見たとおりで、裏の路地で聞こえていた夫婦喧嘩は、ぼくにとつて不運なことに鎮まっていた。でもね、陽気な男が一人、家路に就きながら、「マーフィー・デラニー」^(三六) という当時人気のあった滑稽な歌を口ずさんでいるのが聞こえたよ。この気晴らしを利用して、ぼくは顔を暖炉の方に向けながら、目を閉じて再び横になり、聞こえてくる歌以外のことは考えないようにしたんだ。だけど、その歌も次第に遠ざかって聞こえなくなっちゃった。

元氣一杯の剽軽者^{ひょうせうもの}、マーフィー・デラニー

酒を一杯飲むのに、行き先は場末の居酒屋

樽酒一杯詰め込み、出てきたときは千鳥足

元氣一杯の白爪草^{シヤムロツク}、酔いつぶれて猪突猛進^(三七)

歌っていた男の状態も、おそらく歌の主人公と似たりよったりだったと思うけど、この男がすぐに遠ざかってしまい、ぼくの耳を楽しませてくれることもなくなっちゃった。歌声が消えたんで、うつらうつらしてしまっただけど、それはさわやかな眠りでも深い眠りでもなかったよ。どういうわけか、その歌が頭の中に残ってしまつてね。ぼくは当てもなくさまよいながら、尊敬すべき同郷のマーフィー・デラニーと同じ経験をする事になったんだ。つまり、「場末の居酒屋」から出てくるや、そのまま川にドボンと落っこちて、そのあと釣り上げられて検死陪審員たちに「審理」されたまではよかつたが、土左衛門は「扉の釘みてえに死んじまつて、はい、一巻の終わりだよ」^(三八) っつて、みんなヤブ医者からそう聞かされ、そのとおりの評決を下しちゃった。ところが、その時に土左衛門が意識を取り戻したんで、陪審団と検死官との間に押し問答、というか大激論が勃発し、元氣一杯、楽しさ一杯の中で、歌の締めくくりになつたわけさ。

この流行歌の一本調子にうんざりしながらも、文字どおり最後

の一行までゆっくりと進んで行き、そしてまた初めから——意識が朦朧もうろうとして苦しい状態だったんで、どのくらい続いたかなんて分かりやしない。でもね、最後の最後には、気がつく、「扉の釘みてえに死んじまつた、はい、一巻の終わりだよ」って、ぼくはぶつぶつ言っていたよ。ぼくの内なる、何かもう一つの声みたいなものが、非常にかすかな、しかし鋭い調子で「死んだ！死んだ！死んじまつた！主の慈悲があらんことを！」って言っているように、ぼくはたちまち目が覚めちまい、枕もとからすぐ目の前を見つめていたってわけさ。

それで——信じるかい、ディック？——あの呪わしい人物がすぐ前に立ち、ベッドからニヤード(三五)と離れていない所で、石のように冷たい、悪魔みたいな顔をして、ぼくをジッと見ていたなんて——

ここでトムは話をやめて顔から冷や汗を拭きました。ぼくは気分がひどく悪くなり、女中の顔はトムと同じように真っ青でした。ハラハラドキドキの体験をした現場で、ぼくたちは額を寄せ合っていたので、家の外が真昼のように明るくなり、往來の雑踏が始まったことを皆一様に喜んでいたに違いありません。

「ハッキリと見えたのは三秒ほどだった。それからぼやけてしまったが、ずいぶんと長い間、それまであいづが立っていた場所、つまりぼくと壁の間だけど、そこに黒ずんだ蒸気の柱みたいなもの

が残っていたよ。あいつはまだそこにいるはずだと思ったね。でも、かなり時間が経ってから、この幻影も消えちまった。それで、ぼくは衣類を下の玄関の広間へ持って行き、そこで扉を半分ほど開けたままにして着替えをし、それから往來へ出て行って、ずっと街中を歩いていったってわけさ。朝になって帰宅した時は、不安と疲労で見えるも無惨な状態だったよ。ぼくは馬鹿だった。どうしてそんなに取り乱してしまったのか、恥ずかしくて君に話せなかつたんだから。君に笑われると思ったんだよ。特に、ぼくはいつも哲学めいたことを話し、君の幽霊話を軽蔑していたからな。結局、君に話せば容赦なく逆襲されるだろうと思いい、それでぼくの怪談は自分の胸の内にとまっていったというわけさ。

ところで、ディック、この最後の体験以降、ぼくはもう夜は自分の部屋へ戻らなくなつたんだ。ホントの話なんだけど、信じてくれないだろうね。君が自分のベッドに戻ったあと、ぼくはしばらく居間で起きていて、それから忍び足で玄関の広間の扉まで行き、そのまま外出して、「ロビン・フッド」亭(四〇)で最後の客が帰るまでジツとしていたものさ。そのあとは、番兵よろしく朝まで街路をゆっくりと歩きながら、夜の時間を過ごしていたんだよ。

結局、一週間以上もベッドの上で寝ることはなかった。「ロビン・フッド」亭の長い腰かけで居眠りすることもあれば、日中に

椅子に座ったまま昼寝をすることもあったけど、いわゆる普通の睡眠はまったく取れなかったよ。

別の家に移ろうと決意を固めていたのに、移る理由については君に話す気になれず、なぜか一日また一日と、話すのを延ばしてしまつたわけだ。こんなふうにもたもたしていると、ぼくの生活は刻一刻と、警察に追われる凶悪犯の生活みたいに、惨めなものになつてしまつたよ。こうした悲惨な生活ぶりで、完全に具合が悪くなつちまつたのさ。

ある日の午後だつたか、ぼくは一時間でいいから君のベッドでぐつすり寝てやろうと思つた。自分のベッドはいやだつたんで、あの不吉な部屋には二度と入らなかつたよ。でも、ぼくが夜その部屋にいないという秘密を女中のマーサに知られるといけないから、ベッドを乱すために毎日こっそりと忍び込んではいたんだがね。

運の悪いことに、君は部屋に錠を下ろして、鍵を持って行つてしまつた。それで仕方なく、いつものように寝具を乱して、ベッドで寝ていたと思えるようにするために、自分の部屋へ行つてみたよ。ところが、いろんな状況が重なり合つて、その晩ぼくが体験することになる恐ろしい事件が起こつちまつたんだ。まず、ぼくは疲労困憊して、死ぬほど眠かつた。それから、この極端な疲労が神経に及ぼす影響たるや、さながら麻薬のそれに似てい

て、その頃にはぼくの習慣となつていた興奮が伴うような恐怖を——そんな状態でなければ、おそらく感じていたはずの恐怖を——感じなくなつちまつていた。でもね、窓が少し開いていて、部屋には心地よい新鮮な空気が充滿して、さらには楽しげな陽光で部屋は実に心地よくなつていたよ。こんな場合にだよ、疲れていたぼくが一時間ほど昼寝をせずに済むわけじゃないか。あたり一面に賑やかな生活の雑音が響き渡り、部屋の隅々まで現実世界の明るい陽光が満ちていたんだからね。

ぼくはほとんど抵抗できない睡魔に——不安を抑えながらも——負けてしまい、コートを脱いで幅広のネクタイをゆるめただけで、倒れ込んでしまつた。絶対に三十分以上は昼寝をしないぞつて自分に言い聞かせ、ふかふかのベッドと布団と長枕を久しぶりに楽しんだつていうわけさ。

あれはひどく狡猾なやつだつた。あの悪魔め、頭がポーンとしままで寝る準備をしていたぼくに、注意を払っていたに違いない、絶対にね。寝不足で心身とも疲れ切つて、優に一週間の睡眠が滞つていたのに、そんな状態でも三十分という時間限定の昼寝が可能だと思ふなんて、ぼくはホントに間抜けだつたよ。結局、死んだように、長く、夢も見ることなく寝ていたんだからね。突然、ぼくは静かに、しかし完全に目が覚めたよ。それはハツとしたからでも何か恐怖を感じたからでもないんだ。もちろん君

も憶えているだろうが、それは夜中もかなり更けた頃、そう二時頃だったと思うよ。長時間ぐっすり眠ることで生理的欲求が満たされた場合、こんなふうには人は突然、静かに、完全に目を覚ますものさ。

すると、暖炉の近くにある、あのガタピシの古い長椅子に、一人の男が座っていたよ。背中をぼくの方に向けていたけど、見間違えるなんてことはあるはずがない。あいつはゆっくりと振り返ると、うわあ！悪意と絶望からなる忌々しい表情を浮かべた冷酷な顔で、さも満足そうにぼくを眺めていやがった。その時はもう、あいつがぼくの存在を意識していることや、悪魔のような怨恨に駆り立てられていることは、疑いようがなかったよ。だって、立ち上がって、ベッドの脇まで近づいてきたんだからね。あいつはロープの先端を自分の首に巻き、もう一方の先端をぐるぐると巻いて、それを手にしっかりと握つていやがった。

でもね、この恐ろしい危機に際して、ぼくは守護天使から勇氣を与えてもらったんだ。あの恐るべき亡霊に見つめられたまま、数秒間ぼくが立ちすくんでいると、あいつはベッドの近くにやって来て、今にもベッドの上に乗ろうと見えた。その瞬間、ぼくは亡霊と反対側の床にベッドから降りたけど、次の瞬間には、どんなふうにかは憶えていないが、玄関の広間に来ていたよ。

だがね、ぼくは金縛りはまだ解けていなかった。まだ死の影の

谷^(四)を通り抜けていなかったのさ。呪わしい幽霊はまだぼくの前の、階段の手すりの近くに立って、少し身をかがめ、ロープの端を自分の首に巻いたまま、もう一方の端で輪を作つて、ぼくの首に投げるみたいに手に持つていやがった。こんなふうには悪意に満ちたパントマイムを演じながら、あいつは実にみだらな、何とも言えないほど恐ろしい笑みを浮かべていたんで、ぼくは正気を失いそうだったよ。実際に見て憶えているのはそれだけだ。気がつくくと君の部屋にいたつていうわけさ。

ディック、ぼくは見事に脱出できたんだぞ。そのことについては疑問の余地がない。この脱出で、ぼくは生きていくかぎり、慈悲深い神に感謝するからな。こんなやつと向かい合つて立つということが、生身の人間にとってどういうことか、同じような恐ろしい経験をした者にしか想像できないだろうよ。ディック、ディック、ぼくは死の影に襲われ、血と骨の髄が凍る思いをしたんだぞ。もう二度と今までのような自分ではいられない。二度とね、ディック。絶対に！」

ぼくたちの——前にも言ったように、五十二歳になる——女中は、トムが話を続けている間は手を休め、あんぐりと口を開けたまま、黒いビーズのような小さい目玉の額の額に八の字を寄せ、時おり肩越しに盗み見しながら、少しづつ忍び寄っていました。それで、ぼくたちが気づいた時には、すぐ背後に立っていたので

す。話の合間に、彼女は小声で真剣に何度も論評を加えていたが、そうした論評や叫び声については、話を簡潔にするために省略させていただきます。

「その噂についていや何べんも聞いたんじやが」そのとき女中は言いました。「オラは今の今まで信じやせんかったんじや。じやがな、今となつちや、信じねえわけにはいくめえ。おつかさんは裏手の路地に住んどるんじやが、ホンマに変ちくりんな話をいろいろ知つとるけえ、その噂も話してくれるはずじや。じやがな、あの裏側の部屋で寝るなんて、とんでもねえこつた。おつかさんは、キリスト教徒たるもんが、あんな部屋で夜を過ごすのはもぢろんじやが、昼間だつてオラが出入りするの、いやがとつたんじやよ。おつかさんの話じや、あの部屋は絶対あの人が使つとつた部屋に間違ひねえつてことじや」

「誰の部屋だつて？」ほくたちは同時に尋ねました。

「まあ、あの人の——老判事の——ハロックス判事の部屋に決まつとるじやねえか。どうか神様、あの人の霊を休ませてくたせえまし！」こう彼女は言つて、不安そうに周囲を見渡しました。

ほくは「アーメン！」とつぶやきました。「でも、あそこで死んだのかい、その老判事は？」

「あそこで死んだのかじやつて？ いやいや、あそこでつていうわけじやねえ。確か、あの爺さんが首を吊つたのは、階段の手す

り越しじやなかつたかね？ ああ、くわばらくわばら！ 切断された縄跳びの取つてが見つかったのは、あの引つ込みアルコイツのあたりじやなかつたかね？ ナイフについていや、うわあ、首を吊るのに縄跳びのヒモを結びつけた場所じやなかつたかね？ 縄跳びのヒモの持ち主は家政婦の娘だつて、おつかさんはよく言つとりましたよ。それからつても、娘つ子がすすく育つことはなかつたそうじや。寝てる時に突然ガバツと起きて、悪ムや恐怖に襲われちまつたんじやろうかね。よく夜中に金切り声で叫んどつたそうじや。老判事の幽霊が娘つ子を苦しめとるんじやろうつてことじやつた。首の折れ曲がつた爺さんが出てこんように、娘つ子は喚わめいたり叫んだりしとつたそうじや。それからつても、「ああ、旦那様、旦那様があたいに足をドンドン鳴らして、おいでおいでしとる！ かあさん、あたいを行かさんと、ああ！」つて、金切り声で叫んどつたそうじや。で、かわいそうに、とうとう娘つ子は死んじまつてね。医者どもの話じや、原因は水頭症四二だつたそうじやよ。そのくれえし分かるんかったんじやろうね」

「こういつたことが起つたのは、どのくらい昔のことなんだね？」と、ほくは尋ねました。

「まあ、どうしてオラなんかに分かるんじやね？」というのが彼女の返事でした。「じやがな、ずいぶん昔のことに違ひねえ。だつてよ、齒が一本もねえのにパイプを口にくわえてた、その家

「ここに住んだ人たちはみんな、不幸な目にあつたんじゃよ」と、女中は話してくれました。「ここじゃな、いつも予想外の事故が起こったり、人が急に死んだりして、みんな短命だったそうじゃ。ここを最初に借りたのは、ある家族で——名前は忘れちゃったけど——ともかく、二人の若い娘さんと父親が住んでいたそうじゃ。父親の方は六十歳ぐれえじゃったかね。あの年齢じゃ滅多に見られんほど、がっしりした健康そうな紳士だったそうじゃ。で、父親はこの不吉な家の裏側の部屋で寝とつたわけじゃ。ああ神様、オラたちに危害が及びませんように！案の定、ある朝のことじゃつたが、父親は体がベッドから半分はみ出してな、床の近くまでぶら下がって死んでたんじゃよ。頭はプディングみてえに膨れちまい、リンボクの実^{四三}みてえに真っ黒になつてまつてね。どうやら原因は発作だったようじゃ。腐つた鯖^{さば}みてえに死んじまつてたんじゃ。本人は何が原因だか分からんかったじゃろうが、年とつた連中はみんな、この父親を恐怖で発狂させて殺しちまつたのは、老判事以外にや考えられんと言つとつたよ。いやはや、とんでもねえことじゃよ！

しばらくしてじゃが、今度はな、ある年輩の裕福な御婦人が屋敷を借りましたんじゃ。その人がどの部屋で寝たかは知らんのことじゃが、ひとり住まいじゃつた。いずれにせよ、ある朝のことじゃが、召使いたちが早めに仕事に降りて行つたそうじゃ。じゃ

が、その人は廊下の階段に座って、ぶるぶる震えながら、まつたく気が狂つちまつて、ひとりごとを言つとつたそうじゃ。「私を行かさないで。彼を待つと約束したのですから」って言うばかりで、その人の召使いたちも友だちも、そのあとずっと何も聞き出せんかつたということじゃ。「彼」っていうのが誰のことか、その御婦人の言葉からは理解できんかつたんじゃが、この古い屋敷のことを知つとる人間で、その人の身に起こつたことの意味が分からん者は、もちろん一人もおらんかつたじゃろうね。

それからまたのち、この屋敷が下宿の形で貸し出された時じゃけど、ミッキー・バーンという人が、奥さんと三人の幼い子供と一緒に、例の部屋を借りましたんじゃ。確かにオラは聞いたんじゃよ。バーンの奥さんは、子供たちがよく夜中にベッドで体を持ち上げられとつたって、自分で言つとつたんじゃから。どんな力を持ち上げられとつたんか、それは分からんかつたそうじゃがね。それから、子供たちは一時間ごとにビクツとしてな、金切り声をあげとつたそうじゃ。こいつは死んじまつた家政婦の娘つ子と同じじゃねえか。で、とうとうある晩のこと、かわいそうにミッキーが（この旦那は時々こういうことがあつたんじゃが）一杯ひっかけたところ、何とまあ、真夜中に階段で物音が聞こえたような気がしたって言うじゃねえか。酒が入つとつたこともあつたんじゃろうが、どうしたのか気になって、自分の目で確かめに

行かねえことにや満足できんかったようじゃ。で、結局、奥さんが最後に聞いたのは、「ああ神様！」っていう旦那が叫んだ言葉だけじゃったが、そのあと何かが転落したようで、その音で屋敷全体が揺れたそうじゃよ。案の定、旦那は入り口の部屋の下に続く階段に倒れとったそうじゃが、どうやら欄干を飛び越えて頭から落ちたみてえで、くの字に首が折れとったということじゃ」

そのあと女中は付け加えて言いました――

「ちよつと裏の路地まで行つて、ジヨー・ギャビーをこちらにやりますから、茶道具の残りを荷造りさせて、身のまわりの品をすべて新しい下宿に運ばせてくだせえ」

それで、ぼくたちは全員で颯爽さつそうと出て行きました。この不吉な屋敷の敷居をまたぐのも、これが最後かと思うと、全員が楽に呼吸できるようになっていたことは言うまでもありません。

さて、小説というのは、主人公をその珍しい経験を通してだけでなく、その世界とかなり距離を置いた所からも見るものですが、そうした小説の領域における昔からの慣例に従って、ぼくはまだ多くのことを書き足すことができます。厳格な意味でのロマンスに登場する血と肉と骨を持った生身の主人公と普通の小説の作者との関係は、この煉瓦と木とモルタルでできた古い屋敷とその実話を記録する小生との関係と同じです。そのことに皆さんは気がつかれたに違いありません。従いまして、ぼくは義務の命ず

るままに、この古い屋敷に最後に降りかかった災難を語ることにしましょう。それは簡単に言えば、こういうことです。ぼくの話が終わったあと、二年間ほど自称ドールシユートルフ男爵という偽医者いせが屋敷を借りていたそうで、彼はゾツとするような得体のしれないものをブランデー漬けにして、その瓶びんを客間の窓にたくさん並べ、よくあるような虚偽の誇大広告を新聞にたくさん出していたそうです。この紳士は禁酒を美德の一つと考えていなかったようで、ある晩のこと葡萄酒に酔いつぶれ、こともあろうにベッドのカーテンに火をつけてしまったのです。自分の体は一部を火傷やけどしただけで済みましたが、屋敷の方はすべて焼けてしまいました。のちに屋敷は再建され、しばらくは葬儀屋が店を構えていたそうです。

これで、ぼくは自分とトムの体験談について、幾つかの重要な付随事項と一緒に、話し終えたことになりました。お約束を果たしましたので、皆さんには「お休みなさい、よい夢を」と申し上げることにいたしました。

【訳注】

(一) ローマの詩人ウェルギリウス (Vergil, 70-19B.C.) の『アエネーイダス』(The Aeneid, c.29-19 B.C.) の第四巻第二九三行 (molissima fandi

- tempora*) からの引用。
- (二) 二人が勉強していたのはダブリン大学トリニティ・カレッジ医学部。大学の創立は一五九二年で、医学部の開設は一七二一年。
- (三) ヘンリー八世はローマ教皇との長い争いの末、支配下から独立して、自ら英国国教会 (Anglican Church) の首長となり、教会を国家に従属させた。教義や聖職者の階級などにカトリックの要素を残している反面、プロテスタントの宗教改革の多くの面も含んでいる。
- (四) ダブリンの中央を東西に流れるリフィー川 (Liffey) の南側に隣接するダブリン城の南東角から南に走る通り。この通りの北東にトリニティ・カレッジがある。『アイリッシュ・メロデイズ』で有名な詩人トマス・ムア (Thomas Moore, 1779-1852) は十二番地で生まれた。
- (五) 現在のカレッジ・クリーン (トリニティ・カレッジの西側) にある大邸宅で、ヘンリー八世によって解体された女子修道院の跡地に建てられ、十七世紀にはアイルランド議会被置かれていた。
- (六) ジェイムズ二世 (一六三三―一七〇一) は一六八五年の兄王の死後に王位に就いたが、絶対王制の強化とカトリック優遇政策によって議会と対立し、一六八八年に王位を追われてフランスに亡命した。
- (七) 一六八七―八八年にダブリン市長を務めたハケット (Sir Thomas Hackett) は、プロテスタントに対する残虐で野蛮な行為で知られ、彼らの多くが地所を捨ててイングランドに逃れた。
- (八) 建物の軒などを支えるため、壁の上方を壁面に沿って突出させた部分 (cornices)。
- (九) 変死の疑いのある死体を調査し、検死法廷において陪審員とともに死因を審理するもので、定員は十二名。
- (十) ポルトガル原産の甘口ワインで、多くは深紅色。
- (十一) 本来は冬至前後の天候の穏やかな二週間を意味し、昔はハルシオン (ギリシャ神話上の鳥) が巢ごもりをすると考えられた。一般には平穏な時代、古きよき時代、黄金時代を意味する。
- (十二) 西洋建築で彫像などを置くために壁面に作られた窪み。または壁が引込んで陰になった空間。
- (十三) 『マクベス』第五幕第五場で、連続する恐怖に襲われ、その味を忘れてしまったマクベスが、夫人の死に際して発する言葉。
- (十四) 劇の途中・終わりで演技者がそれぞれの位置で一瞬動作を止めること。
- (十五) 英国の桂冠詩人 (一八一三―四三)、ロバート・サウジー (Robert Southey, 1774-1843) が一七九九年に出版した『詩集』に収められた「バークレーの老婆」(The Old Woman of Berkeley) からの引用。
- (十六) 一八四二年にウィーン大学のロキタンスキー (Karl Freiherr von Rokitansky, 1804-78) が『病理学的解剖学』を発表して、唯物論が医学を席卷するようになった。
- (十七) 神の啓示を認め、これに基づく宗教 (revealed religion)。反対は自然宗教で、奇跡や啓示を認めず、人間の理性と経験を基にする。
- (十八) ドイツの医学者メスマル (Franz Anton Mesmer, 1734-1815) は動物磁気 (animal magnetism) による催眠術を初めて医療に用いた。
- (十九) 動植物の電気現象を研究する生物学の一部門。
- (二十) 十六世紀の有名な船乗り、貿易業者、女海賊、政治家 (本名 Grace O'Malley)。父親が貿易船を持つアイルランドの西海岸で育ち、一族の長となって活躍し、身内の者がイングランドに捕らわれた時には、エリザベス一世に釈放を嘆願した女丈夫。
- (二一) ウィスキーにジュース、ソーダ、水、ミルクなどを混ぜ、砂糖・

香料などで味をつけた飲料。

- (二二) 英国の詩人・劇作家ダヴェナント (William Davenant, 1606-68) による『マクベス』の一六六四年の翻案(第五幕)にある魔女の親玉ヘカティ (Hecate) の歌への言及。
- (二三) ナポレオン戦争(一八〇五〜一五年)の時にイギリスで流行した歌 (Brandy-O) の一節。
- (二四) 英国の政治・文芸を中心とした評論週刊誌。前身はステイール (Richard Steele, 1672-1729) とアディソン (Joseph Addison, 1672-1719) が主宰した『スペクター』(The Spectator, 1711-12, 1714) で二人の共同執筆で当時のジャーナリズムの地位を確立した。
- (二五) 五十人分に匹敵する音量を持っていたというトロイ戦争で活躍した伝令使。
- (二六) 英国の冒険小説家、特に少年小説の分野で知られるバラントイン (Robert Michael Ballantyne, 1825-94) の『変わりやすい風』(Shifting Winds, 1866) 第十四章からの引用。
- (二七) ペリシテ人の巨人戦士。ダヴィデによって殺された。「サムエル記上」第十七章第四八〜五一節を参照。
- (二八) 『ヴェニス商人』に登場するユダヤ人高利貸し、シャイロックの第四幕第一場の台詞。
- (二九) もとオックスフォード大学の学生俗語で、通例は男同士の同室の友 (shum > chamber mate)。
- (三〇) オンジェ通りの東側に平行して走る短い通り。五番地に彫刻家ホーガン (John Hogan, 1800-58) が住んでいた。
- (三一) ヘーバーはギリシャ神話のゼウスとヘラとの娘で、ヘーラクレスの妻。初めはオリンポス山で神々の酒宴の給仕であった。

(三二) 十五世紀末頃からオランダで焼かれ始めた軟質の錫釉陶器すずろに似せた英国産の陶器。

- (三三) 死刑宣告のとき裁判官は黒い帽子(小さな四角の布)を頭に載せた。
- (三四) デイクেনズ『殺人裁判』の訳注(三三)を参照。
- (三五) 強硬症は、外部から与えられた姿勢のままで感覚がなくなり、筋肉が硬直した状態が続くのが特徴。
- (三六) 「黒い瞳のスーザン」(Black-Eyed Susan) など、海の歌で有名な英国の歌謡作家、ディブディン (Charles Dibdin, 1745-1814) の歌とされ、一八二八年の歌謡集に収録されている。
- (三七) シヤムロック (shamrock) はアイルランドの国章に使われる各種のマメ科植物で、聖パトリックの祭日(三月十七日)に飾る。シヤムロックはウイスキーとスタウト(ビール)で割った飲み物の意味もある。
- (三八) 昔トアの強化や装飾に打ちつけた大きな釘 (door-nail) で、「死んだ」(dead)と頭韻を踏む比喻として、使用は中世の詩人ラングランド (William Langland, c.1332-87) の『農夫ユアスの夢』(The Vision of Piers Plowman) まじりかのはず。
- (三九) ヤードは三フィート(約九一センチ四四ミリ)。
- (四〇) 十二世紀頃の英国の伝説的英雄・義賊。緑色の服を着て仲間と一緒にシャーウッド (Sherwood) の森に住んだ。
- (四一) 死の影の谷は大苦難の時のたとえ。「詩篇」第二章第四節を参照。
- (四二) 脳脊髄液が異常に貯留することにより、脳室が拡大した状態で、脳水腫 (hydrocephalus) とよむ。
- (四三) パラ科の常緑小高木。十月頃に葉をつけ、果実は翌春黒く熟す。

【作品と作者の解説】

本邦初訳。原題は「オンジエ通りの不思議な騒動についての話」(An Account of Some Strange Disturbances in Aungier Street)。初出は『ダブリン・ユニヴァーシティ・マガジン』の一八五三年十二月号。一九二三年にベル社からM・R・ジェイムズの編集によって『マダム・クラウルの幽霊』(Madam Crowl's Ghost)の中に再録された。



レ・ファニユ (Joseph Sheridan Le Fanu) は一八一四年にダブリンの高貴な家に生まれた。祖母と大伯父は劇作家であり、姪のローダ・ブロートン (Rhoda Broughton, 1840-1920) は小説家。ダブリンのトリニティ・カレッジで法律を学び、一八三九年に弁護士の試験に合格したが、法律の職業には就かずに、その年にジャーナリストになって、『ダブリン・イヴニング・メール』という新聞の刊行を始めた。一八六一年に『ダブリン・ユニヴァーシティ・マガジン』の経営者となり、この雑誌の編集を一八六九年まで続け、そこで自分の作品の多くを連載した。一八四三年にスザンナ・ベネット (Susanna Bennett) と結婚したが、妻は十五年後に死去。彼の方は一八七三年に生まれ故郷のダブリンで死んだ。享年五十八歳。

レ・ファニユの作品は、言葉数が多く、くどくて難解だと言う批評家もいるが、プロットは巧妙で躍動的である。彼の幽霊物語は現代の恐怖小説の先駆けで、その特徴はいつも美德が勝利を収め、いつも超自然的

な出来事の説明がなされるとはかぎらない点にある。彼はしばしば「アイルランド幽霊物語の父」と呼ばれ、ヴィクトリア朝のアイルランド小説家ではリーヴァ (Charles James Lever, 1806-72) の次に有名であった。吸血鬼を描いた中篇小説『カーミラ』(Carnilla, 1872) はブラム・ストーカーの『ドラキュラ』(Dracula, 1897) に影響を与えたとされている。

